

田中絹代の「花」と「嵐」

——女性たちの「女優・田中絹代」と「監督・田中絹代」——

新潟大学大学院現代社会文化研究科

氏名 鈴木潤

日本映画を代表するスター女優・田中絹代の女優としてのキャリアのなかで、1950年はヒット作にも恵まれなかったばかりか、痛烈なバッシングを浴びせられたもっとも苦しい時期、すなわち「嵐」の時期であった。そのきっかけは、1949年10月から日米親善芸術使節として約3ヶ月にわたってアメリカ各地を訪問したのち、1950年1月に帰国した際の田中絹代の立ち居振る舞いであった。和服を着て日本を発った彼女は、帰国時にはアメリカで仕立てたニュー・ルックに身を包み、「ハロー」のあいさつと投げキスで、彼女の帰国を待ちわびていたファンたちに応えたのである。「女優・田中絹代」なりのファンサービスの一環であったはずのこの投げキスは、「投げキス事件」としてバッシングの対象となった。帰国から数日後の1950年1月24日の『朝日新聞』東京版の夕刊「ニュース映画評」の記事では、このような田中絹代の立ち居振る舞いは「ゾッとするほど不潔」と酷評された¹。映画評論家の川本三郎は「投げキス事件」について、「いま思い返してみるとあれは、田中絹代が戦争未亡人の暗い、それゆえに多くの共感を呼んだイメージを自らの手で壊してしまった」²ために、「多くのファンは衝撃を受け」、「裏切られたと思った」³事件であったと述懐した。川本はさらに、「あれが京マチ子や淡島千景のような戦後派の女優だったら誰も驚きはしなかつただろう」⁴とも述べている。ファンサービスの一環として披露したたった一度の投げキスが、女優としてのキャリアをおびやかすほどの大事件となった背景には、「女優・田中絹代」が、アメリカナイズされた振る舞いをするのが許されない存在として演出されつづけてきたことがあった。「投げキス」を「投げキス事件」に、そして「女優・田中絹代」最大の「嵐」にした「多くのファン」とは、実際には（とくにインテリ層の）日本人男性たちであった。

¹ 「ニュース映画評 絹代の投げキス」『朝日新聞』1950年1月24日、東京・夕刊、2頁（最終アクセス 2022年9月25日）。なお、本論文における朝日新聞の記事はすべて、『朝日新聞クロスサーチ』（<https://xsearch.asahi.com/>）上で、毎日新聞の記事はすべてウェブサイト『毎索』（https://dbs.g-search.or.jp/WMAI/PCU/WMAI_ipcu_menu.html）上で、それぞれ閲覧したものである。

² 川本三郎（2007）『今ひとたびの戦後日本映画』岩波書店、28頁。

³ 前掲。

⁴ 前掲。

しかし、このとき、「女優・田中絹代」をたった3ヶ月のアメリカ滞在であったという間にアメリカナイズされた「アメシオン女優」と見なし、攻撃したマス・メディアがあった一方で、他方ではアメリカで最先端のメイクやファッションを学んだ「女優・田中絹代」を洗練された女性、すなわち「花」として肯定的にとらえ、表現したマス・メディアもあった。前者は男性知識人たちをおもな読者層とする新聞やインテリ系の映画雑誌、後者は女性向け雑誌や大衆向けの映画ファン雑誌であった。

本論は、男性批評家や映画研究者たちによる批評や記述のなかでは見落とされてきた、女性たちにとっての「女優・田中絹代」の姿を明らかにするものである。1924年のデビュー以来、またたくまにスターダムを駆け上っていった「女優・田中絹代」のファンには、当然、男性も女性もいたはずであり、スターに向けられるファンの眼差しは、ファンが属する共同体が異なるのに呼応して、変化していくものである。しかし日本映画研究という学問領域においては、「女優・田中絹代」をさまざまなマス・メディアをとおして受容した女性たちの存在はほとんど忘れ去られてきた。そして、日本映画研究のなかでは田中絹代がもつ「監督・田中絹代」としての側面も閑却されてきた。本論では、「投げキス事件」ののち、1953年に「女流監督第一号」と紹介され⁵、日本映画界全体からの力強いバックアップを受けながらデビューした「監督・田中絹代」を、女性向け雑誌はどのようにとらえ、読者たちに伝えていたのかも明らかにするものである。

第1章では、1950年の「投げキス事件」と「女優・田中絹代」が、男性知識人たちを

⁵ たとえば、2021年11月1日に「女性監督のパイオニア 田中絹代トークイベント」を開催した東京国際映画祭の公式 Twitter (@tiff_site) では、「女性監督のパイオニア 田中絹代トークイベント 日本2番目の女性監督で、今年のカヌヌ映画祭での『月は上りぬ』の上映が話題の田中絹代について語ります！」(2021年10月30日 午後3:52 ツイート) (https://twitter.com/tiff_site/status/1454340489822433282 最終アクセス2023年5月1日) と紹介されているように、現在では「監督・田中絹代」に光が当てられるときには決まって「日本で二番目の女性監督」という文言が添えられる。日本で最初の女性監督とされているのは、溝口健二のもとで監督助手などを務めたのち、満州映画協会で『開拓の花嫁』(1943年)などを監督した坂根田鶴子であるが、坂根田鶴子の作品は『開拓の花嫁』以外は現存していないという(国立映画アーカイブ企画上映「日本の女性映画人(1)」作品解説 <https://www.nfaj.go.jp/exhibition/women202212/#section1-2> 最終アクセス2023年5月1日)。田中絹代が監督となったとき、坂根田鶴子の存在が往々にして忘れ去られ、田中絹代が「女流監督一号」と紹介されていたことも見落としてはならない大きな問題である。なお、田中絹代を「女流監督一号」と紹介したのは、『週刊読売』11巻61号(1953年、読売新聞社)に掲載された「女流監督第1号 田中絹代」(43-47頁)と、『主婦と生活』8巻13号(1953年、主婦と生活社)に掲載された「流監督第一号 田中絹代さんの演出ぶり拝見」(316-317頁)である。

おもな読者層とするマス・メディアと、女性たちや大衆の映画ファンをおもな読者層としたマス・メディアとで、まったく異なるとらえられかたをされていたことを明らかにした。「女優・田中絹代」の「投げキス」に強い拒絶反応を示したのはもっぱらインテリの男性たちであり、女性たちはアメリカ帰りの田中絹代を肯定的に表現するマス・メディアをとおして、彼女をより洗練された「花」としてとらえていた。

第2章では、「女優・田中絹代」のスターイメージの変遷をたどることで、彼女が戦後、敗戦後の日本人(男性)に寄り添ってくれる存在として演出されるに至るまでの過程を明らかにした。「女優・田中絹代」は男性の監督たちによって演出されたスクリーンのなかでは「万年娘役」であり、それゆえに徐々に実年齢から大きくかけ離れてしまうにもかかわらず、「可憐な少女」としての姿を長年にわたって呈示しつづけていた。しかし、女性向け雑誌では、「女優・田中絹代」は1930年代にはすでに「若妻」としての姿が呈示されていた。実は「投げキス事件」は、「女優・田中絹代」にとっては、痛烈なバッシングの的となった「嵐」の時期であっただけでなく、スクリーンにうつる彼女の不自然な若さ(実年齢と、役柄上の年齢とのかい離)を修正し、「女優・田中絹代」が実年齢相応の役柄を演じる契機としても機能していたのである。

第3章では、実年齢相応の中年の女性役を演じることで男性批評家たちからの評価も取り戻し始めた「女優・田中絹代」が、「監督・田中絹代」となったとき、種々の雑誌がどのように彼女を取り扱ったのかを明らかにした。「監督・田中絹代」の作品は、つねに女性たちに主眼が置かれている。「監督・田中絹代」の作品は、男社会であった日本映画界の黄金期のなかで女性が女性を描いた稀有な作品群と言える。そして「監督・田中絹代」を紹介する女性向け雑誌の記事は、女性監督が女性を描くとき、女性たちはそれをどう受け止めたのかを示すものである。

本論は、従来の男性批評家・研究者が見落としてきた「女優・田中絹代」のスターイメージを明らかにするとともに、日本映画史のなかで長年にわたって埋もれてきた「監督・田中絹代」の作品分析を行い、女性が表現し、共有してきた日本人女性の戦後経験を再度歴史化し、ジェンダーと表象の関係に新しい光を当てた。「監督・田中絹代」はパンパンなど、時代に翻弄される女性たちを数多く描いたが、それは同情を誘うような弱々しい姿の女性たちではない。「監督・田中絹代」は、次世代の女優たちを多く起用しながら、みずからの足で立って生きようとする、力強さを感じさせる女性たちの姿を描くことで、男性たちの体面を保つものと戦っていたと言えるのである。